

母親の語りに見られる地域差(2)

東京と沖縄の発話構成, 共同作業としての語りの比較

日本獣医畜産大学 柿沼美紀
文京学院大学 上村佳世子

Telling Stories as a Joint Activity How Tokyo and Okinawa Mothers Organize the Activity

Nippon Veterinary and Animal Science University KAKINUMA, Miki
Bunkyo Gakuin University UEMURA, Kayoko

母親の語りの発話構成及び母子相互作用の地域差の検討を行った。沖縄と東京の親の語りには、1) 言及項目数、2) 語りのスタイルに違いが見られた。東京の親は沖縄の親に比べ言及項目数が多いだけでなく、その範囲も日常生活並びに未来へのものが含まれている。また、解釈の根拠を提示する傾向が見られた。語りのスタイルにおいては、両地域とも基本的には親主導で、子どもが意思表示をするとそれを受容している。ただし全体的に沖縄の親が子どもにシンプルな形で状況を説明するのに対し、東京の親は子どもに手がかりを提示し、興味を喚起する傾向があった。このような語りのスタイルの違いが示された背景として、それぞれの生活環境において接する人間関係の特性が考えられる。母子の共同で構成される語りでは、このようにそれぞれの地域に合った語りのスタイルが選択され、使用されており、子どもは母親とのコミュニケーションに参加することによって、必然的にそうしたスタイルを獲得するものと考えられる。

【キー・ワード】 語りのスタイル, 地域差, 東京, 沖縄

Story telling style of Okinawa mothers and Tokyo mothers are compared. In both areas, the session is mainly led by the mother but if the child presents a different idea, mother often goes along with it for a while, and then takes the lead again. Tokyo mothers not only mention more items in the picture, but also move in and out of the picture to refer to the daily life or to the future. Okinawa mothers tend to focus on basic ideas, while Tokyo mothers tend to give hints to children to help understand what goes on. These differences may be due to the differences in the life styles, particularly of the interpersonal relations in that particular society. In case of mother-child joint activities, mothers tend to reflect the narrative style of the society they live in and the child acquire the style by participating in such joint activity.

【Key Words】 Story telling styles, Sub-culture differences, Japan

はじめに

われわれが何かを語る際には、その語り手の特性や語りの内容に応じたスタイルが選択される。語り手のスタイルには、登場人物や場面設定、出来事、結論といったような一定の物語性があり、全体を語るために必要な情報が採用されていく。このスタイルには、語り手の年齢、性別、職業などの社会的地位や語りがおこなわれる文化的、社会的状況が反映され、そこに語り手の目的と意思がのせられて相手に伝えられる。すなわち、そのスタイルは、ひとつの文化的道具としてコミュニケーション活動に有効なアフォーダンスとして機能し、また他方でそうした活動を制約することにもなり得るのである (Wertsch, 1998)。

異なった地域の母親の語りを通して、子どもがどのように自らの語り手のスタイルを獲得するかを検討するため、東京と沖縄の母親の語り手のスタイルを比較したところ、語りの時間においては、東京の方が沖縄よりも長い傾向にあること (柿沼, 2001)、絵の解釈に関しては、東京の親子は複数の可能性について言及するのに対し、沖縄では単一の解釈を行う傾向が見られた。また、東京の親子は沖縄に比べより多くの言葉の種類を用いていた (柿沼・上村, 2001) などの違いが見られた。このようなスタイルの違いは、それぞれの地域、文化における語り手のスタイルの違いを表しており、それはまたそこでの適応スタイルの違いを反映している。1枚の線画を基に、母子でストーリーをつくるという限定された場面においても、それぞれの地域文化において人間関係を解釈し説明する上で必要となる最小限の条件が含まれているものと考えられる。また、ここでみられる語り手のスタイルが、日常生活のコミュニケーション活動で必要とされ、また有効に機能するような思考パターンであると推測されるのである。

本研究では先の研究をふまえ、それぞれの地域の発話の構成、また所要時間につながる要因について検討した。特に母親がどのような枠組みで情報を提示し、子どもはそれに対してどのような対応をとるのか、さらには親子の共同作業としてどのような形態をとるのかを検討していく。そこには、それぞれの文化的環境に適応する上で必要となる情報が含まれると同時に、こうした母親との共同行為に参加することによって、子どもは適応的な語り手のスタイルを身につけていくと考えられる (Millerら, 1990; Wertsch, 1998)。

方 法

被験者：東京、沖縄の3歳から5歳の子どもの母親、それぞれ13組を対象とした。

課題：Wakabayashi, Fernald & Kakinuma (2001) で用いられた課題を使用し、柿沼 (2001)、柿沼・上村 (2001) と同様の手順で実施した。4枚の絵は子どもの絵本を参考に作成した。そのうちの1枚 (図1) について分析をおこなった。課題は自宅、友人宅、保育所など子どもが日常的になれている場面で行った。母親に絵を用いて子どもに話をするようにと指示し、その様子を映像と音声で記録した。



図1 母子会話で刺激として用いた「砂浜」場面線画

研究1 言及項目傾向の検討

方法

コーディング: 発話を以下の分類でコーディングをおこなった。「直接的な説明」-服, 砂浜(砂場), 城(山), 魚; 「情報をまとめる」-遊んでいる, みんな, ひとり; 「情報の処理」-数(子どもの数を数える), 配役を決める(これは ちゃん), 今後の展開(これから をする); 「自己との関連において語る」-自分なら(ちゃんなら, $\times\times$ できるよね), 自分の経験(も砂遊びをした), 願望(こんど海に行きたいね, 砂遊びしたいね)。それぞれ特定の項目に関して言及されているか否かで判断した。

結果

言及項目数: 東京と沖縄の平均言及項目数は, それぞれ7.5項目と5.0項目であった(図2)。
 言及項目内容: 全体的に東京の母子の言及数が多い(図3)。「直接的な説明」では, 東京の親が水着に着目する頻度が高かった(東京11組, 沖縄3組)。「情報をまとめる」では, 全体的な傾向以外には大きな差は見られなかった。「情報の処理」では, 今後の展望に関する言及が沖縄で少なかった(東京5組, 沖縄1組)。「自己との関連において語る」では, 沖縄で「願望」が少なかった(東京5組, 沖縄1組)。

考察

平均言及項目数は東京の方が多かったが, 発話の傾向は基本的に東京と沖縄では似ていた。東京と沖縄の項目数の違いを構成しているのは(2.5項目), 細部への着目(服装)と見えない(目の前の絵には描かれていない)部分でもある今後, 願望への言及(主として未来への言及)である。東京の親子の場合, 一枚の絵を介して日常生活を含めてやりとりが展開している様子が伺える。一方, 沖縄では親子のやりとりは絵の中の中心的な要素にとどまっている。つまり, 内容を絵に描かれている現在の要素に焦点化して短時間に提示していることが伺える。

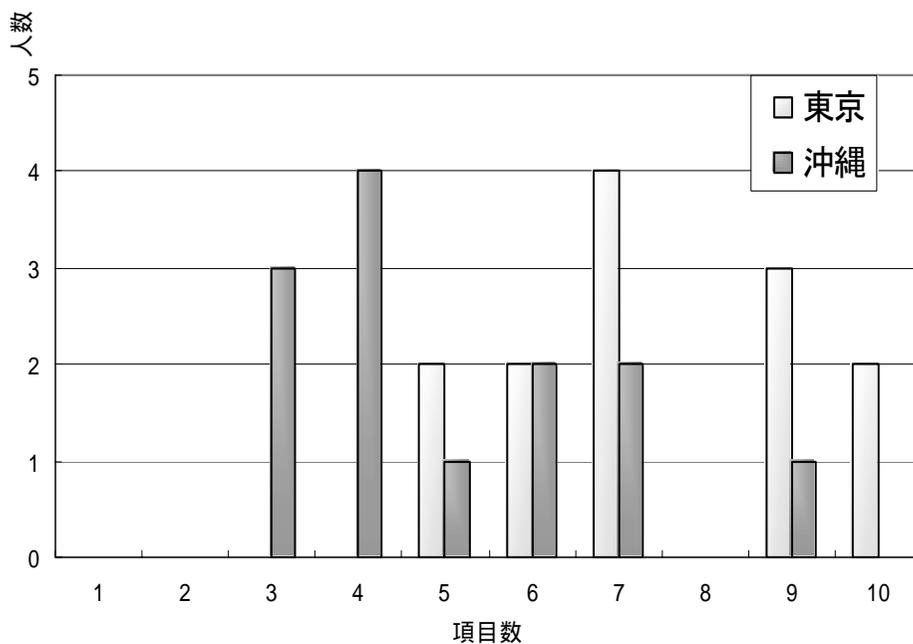


図2 母親の発話に提示された項目数の分布

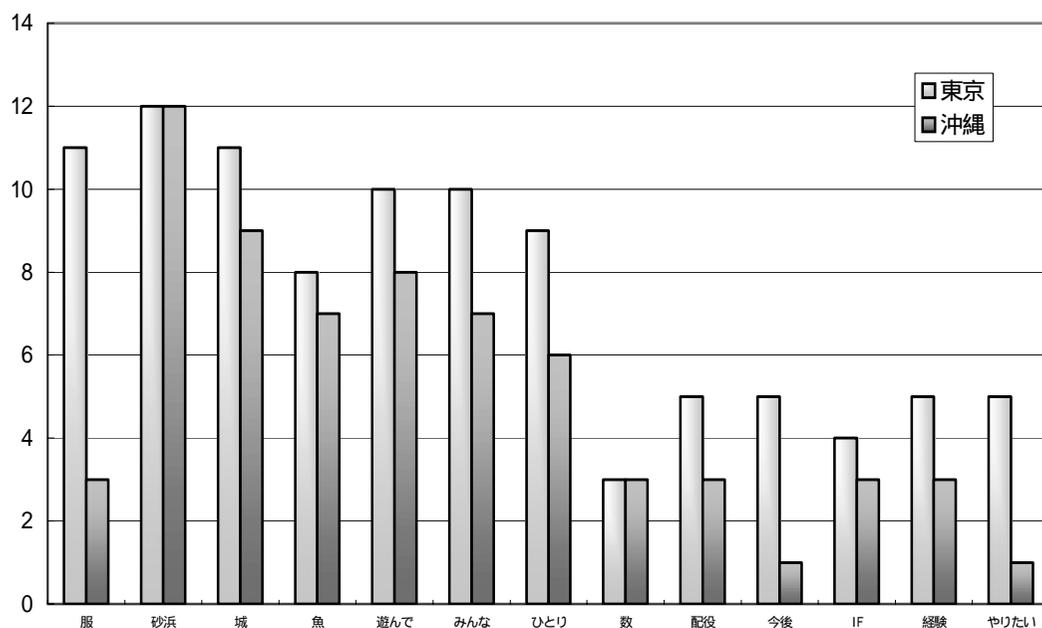


図3 各項目に言及した組数 (13組中)

研究2 事例検討による内容分析

方法

言及項目数、言及内容がその地域の特性を表していると思われる4組(表1)を選択した。東京の場合、7項目に言及しており、項目内容に「服装」および「今後」もしくは「願望」など、未来に関するものが含まれている2事例;沖縄の場合は4項目に言及しており、絵の直接的な内容に言及している2事例について検討した。

結果

事例1(沖縄)

母親が紙芝居的に、絵を説明する形で進めている。まず、場面設定(全体の活動)の説明をおこなっており(1;括弧内の数字は発話番号を示す)、次に、場面の一部分に注目し(2)、さらに具体的な制作物の名称を述べている(4)。それに対して、子どもは受動的に母親のことばを聴いている(3,6)。発話内容は、絵に関する直接的な説明に限られており、登場人物の今後にも絵の枠組から外に出ることもなく、また登場人物の服装にも言及していない。

表1 沖縄(2事例)と東京(2事例)の母子発話

<p>沖縄の事例：4項目</p> <p>JKO-15</p> <p>1 母：この絵はみんなで楽しく砂場遊びをしています。(砂場)</p> <p>2 一人だけ大きな、これ何かな?(ひとり)</p> <p>3 子：・・・</p> <p>4 母：クジラ?(魚)</p> <p>5 ふふ、楽しそうに遊んでいます(遊ぶ)</p> <p>6 子：・・・</p> <p>7 母：はい、つぎ</p>
<p>JKO-7</p> <p>11 母：こっちは何してるの、たく?</p> <p>12 子：あー</p> <p>13 母：お友達なにしてる?</p> <p>14 子：しゅなば(砂場)</p> <p>15 母：砂場</p> <p>16 あ、砂場か、</p> <p>17 こっち何?</p> <p>18 一人だけ遊んでる(遊ぶ)</p> <p>19 子：お山(城)</p> <p>20 母：お山作ってる</p> <p>21 子：うん、</p> <p>22 母：こっちはたくさんいるのにね・・・</p> <p>23 こっちは一人だけで遊んでるね(ひとり)</p> <p>24 子：うん</p> <p>25 母：んー</p> <p>26 砂場かー</p>

東京の事例(7項目)

JKII-12

- 31 母：何してるとこ これ？
 32 子：わかんない
 33 母：お砂場遊びなじゃい これ ほら？(砂場，遊び)
 34 うん，座ってて
 35 子：ん？
 36 母：お砂遊びかな ほら？
 37 子：・・・
 38 母：幼稚園のお友達かな？
 39 子：・・・
 40 母：海に行つて みんな水着着てるから きつと海に行つて砂浜のところ・・・(水着)
 41 子：うん
 42 母：みんなで 一緒にお城作ったんだね(城)
 43 子：ん
 44 母：ね ほら 旗までたてちゃって
 45 かつこいいね
 <省略>
 46 子：これから海で泳ぐのかな？(今後)
 47 母：うん 終わつたらみんなで海で泳ぐのかな？
 48 ね
 49 子：さか そうしたら魚釣りするんじゃない？
 50 母：魚釣りするの
 51 いいね
 52 それじゃつた魚食べようかね みんなで

JKII-11

<省略>

- 61 母：お山かな？
 62 ね，そうか
 63 おもしろそうだね
 64 ねえ，この子だけ 一人で遊んでるね，(ひとり，遊ぶ)
 65 ね，一緒に遊ばないのかな？
 66 一人がいいのかな？
 67 ね，楽しそうだね
 68 ゆりちゃんだったら お山でお砂で何作りたい？(城，自分)
 69 子：わかんない
 70 母：なんで？
 71 何作りたい？
 72 子：砂でお山
 73 母：お山作る？
 74 ほんとう？
 75 そうだね，大きなお山作りたよね
 76 子：トンネルお山
 77 母：トンネル作る？
 78 ほんとう？
 79 子：トンネルのお山
 80 母：うん，トンネルさ 掘ってさ
 81 あと 川も作っちゃおうか？(自分)
 82 ね，こんど作りに行こうっか

<省略>

83 母：ゆりちゃんもお砂で遊びたいよね？

84 海行きたいよね？

85 子：海行きたい

86 母：海行ったらさ、お砂がすごいたくさんあるからさ、すごい大きなお山も作れるしさいろんなの作れるじゃない

<以下省略>

事例2(沖縄)

母親は子どもに絵の内容について言及させようと、同じ質問を繰り返している(11, 13)。子どもは最初には答えなくても(12)、2度目の質問で答えるチャンスを得ており(14)、母親はそれを受容している(15, 16)。ここでも、このようにまず全体の場面について言及し、次に部分に注目させている(16, 17)。母親は質問(17)の後に具体的な手がかりを出す(18)ことによって、子どもの反応を引き出していると言える(19)。発話の内容は、絵についての直接的な言及にとどまっている。

事例3(東京)

前半は、母親が一方的に絵の内容を直接説明しており、やはり子どもから得られたのは応答の拒否(32)や単純な応答(41, 43)が主であった。それでも母親は質問を繰り返し(33, 36)、子どもを引き込む形で、徐々に詳細な登場人物(38)や場面設定(40)、登場人物の活動内容(42, 44)に言及している。母親は、東京の母親の特徴でもある登場人物の服装に言及しており(40)、これは「海」という場面設定の根拠を提示するものとなっている。ここまでの内容においても、子どもの応答状況と比べて母親の発話量が多く、子どもの注意を絵の様々な部分に喚起し、少しずつ手がかりを提示していつている(何の場面か 砂場遊び お友達 海、水着 城 旗)。次々と注意対象が提示されるため、子どもの発話の余地がないとも取れる。

後半では、語りは子どもの主導で展開されている。子どもは、絵の直接的内容にとどまらず、活動の今後の展開に言及しており(46, 49)、それを受けて、母親も今後の展開とも枠外の自分達の活動ともとれるような発言をしている(52)。これらの子どもの発話は、前半の母親の詳細な直接説明を踏まえていることと、母親が子どもの発話を無条件に受容している(47, 50, 51)ことによって展開されたものと考えられる。

事例4(東京)

この事例も、子どもの発話数に比べ、母親の発話数がかなり多い。さらに、同じ内容をことばを変えて繰り返しており(64, 65)、さらに、絵の特徴についてたて続けに様々な言及をしており(61-67)、子どもが口を挟む機会すらない感である。後半は、子どもの発話を促すのに、絵の枠組を出て子ども自身の願望(もし ちゃんだったら)に関する質問をし(68, 71)さらに、子どもから応答が得られると(72, 76)、don't you 形式(～したいよね、～しようか)で将来の願望や計画を共有する形をとる発話が顕著に示された(75, 81, 82, 83)。このことによって子どもの発話を得ることに成功しているが、母親の発話を単に繰り返した部分もある(72, 85)。そうした意味では、子どもは語りの展開に参加はしていても、母親が主導でおこなっていると言える。

地域差のみられた項目の機能

東京の母親の発話に特徴的に示された、服装、場面の将来、自己経験や要求に関する言及が、それぞれどのような機能をもつのかをみるために、それぞれの発話の特徴を検討した。

- ・服への直接的言及 ex. 水着を着ている
 - 活動場面の理由づけ 「水着着てるから、きっと海に行って・・(40)」
 - 登場人物の構成や説明 「海水パンツだから男の子かな」
 - 枠外へのつながり 「この水着、 ちゃんと同じ、 ちゃんもプールの時・・」
- ・場面の将来への言及 場面要素を十分理解し、さらに興味をもった場合に出現する。

分析した26組に共通した特徴として、母親の語りが大部分を占めるものであったが、子どもが自主的に言及する場合には、そのやりとりは対等に展開されているとよいと考えられる(46, 49)。
- ・自己にかかわる言及
 - 経験-日常に降りて子どもの反応を喚起 「今日は幼稚園でお遊びした？」
 - 願望-絵の内容に対する興味の喚起 「 ちゃんもお砂で遊びたいね」(83)
 - 仮説-教訓的、ルール提示 「 ちゃんだったら、入れてあげる？」

考察

共通点

母親の言及内容は、全体(場面・活動)から具体的部分(城、魚、みんな vs ひとり)に展開するというように、絵の内容の全体から細部に向かう傾向が示された。場面の未来、語り手(子ども)の経験や願望など、時間的移動や自我関与にかかわる内容にまで発展する場合がある。会話の多くの部分は母親主導で展開される。ただし紙芝居的、質問形式、手がかり提示など、対象者によりパターンはいくつかある。

相違点

沖縄では、絵の内容についての直接的言及が多い。子どもが会話に入ってくれば受容するが、子どもの応答を積極的に引き出そうとはしない。その意味で子ども主体的である。東京では、母親による手がかり提示が頻回に行われる。子どもは口を挟めない(挟む必要がない)場合もある。手がかりとして様々な角度から情報が与えられ、いくつかの可能性や視点、子どもの興味喚起が図られる。それが成功した場合には理解が共有され、対等なやりとりが展開するが、うまくいかない場合には、一方的な質問攻めのやりとりになり、子どもは「わからない」と応答を回避するスタイルをとることが多い。

総合考察

本研究では、大きく分けて二つのことが明らかになった。一つは語り場面における親の態度についてである。一見沖縄の親は主導的で、東京の親は子どもに主導権を持たせるような印象を与える。しかし研究2の考察にもあるように、実際は必ずしもそうではない。同様の課題場面の非言語的分析で

も似たような結果が見られた(柿沼・上村, 2001)。例えば東京の子どもは沖縄の子どもよりも絵に触れたり、指さしをしている。時には次の絵に行くタイミングも決めている。母親も子どもの前に絵をおき、子どもが積極的に絵をみることを促している。それに対して沖縄では、親が絵を手を持ち、子どもはそれに従う傾向が見られる。東京の親は子どもの注意がそれと、子どもを物理的に引き戻す、子どもの体に触れる、呼び戻す、注意を促すなどして、語りを続ける傾向が見られた。一方沖縄の親はそういった対応は行っていない。多くの場合子どもの注意がそれる前に(一枚の絵につき1分以内)次の絵に移っている。

言語的および非言語的分析の結果から、基本的には東京も沖縄も親主導でやりとりが行われていることが伺える。さらに、いずれの地域でも、子どもが会話に参加した場合、母親は受容的な対応をすることが多くみられた。

もう一つの違いは、会話の内容から見た地域差である。基本的には沖縄も東京の親子も絵の中の似たような部分に言及している。しかし、沖縄の親子のやりとりは絵の中の具体的でかつ中心的な要素に集中しているのに対し、東京では具体的な内容から出発して言及の範囲が広がり、自分自身の日常生活との関連づけが行われている。たとえば登場人物の服装や場面内の過去や未来が言及されること、そして、絵の内容に基づいた自己経験や要求が語られることであった。この3種類の情報については、登場人物の行動の理由や状況的な条件、時間的展望に関する情報を述べていた。すなわち、登場人物の行動を判断する上で、いくつかの状況判断の可能性を挙げ、理由づけをするための情報を複数提供するものであった。それに対して、沖縄の母子は登場人物の現在の行動を言及しても、その理由や状況判断の可能性、自己経験に置き換えての仮定などについて語られることはかなり少なかった。

同様の地域差は沖縄と広島の子の遊びの比較研究でも指摘されている(池田, 2000)。池田によると沖縄の親子の遊びの遊びでは目の前のことに集中する傾向があり、広島に比べ枠の外に出る事がすくない。つまり本研究で見られた地域差は、単に東京の親子が人前で話すことに慣れていているといことでだけで説明できないことを示唆している。このような地域差がなぜ生じるのかについては今後の検討が必要である。

語りのスタイルの違いの背景として、それぞれの生活環境において接する人間関係の特性が考えられる。すなわち、東京という地域で生活するには、よく知った人間関係だけでなく、見知らぬ他者との一時的接触もあり、そうした相手ともコミュニケーションをしていかなければならない。そのような場合に、予想もできない行動や考え方にも適応的に対応するには、あらかじめ複数の状況判断や可能性を用意し、他者の行動の因果関係や展望などを考慮にいれて、情報を選択していく必要があると考えられる。一方の沖縄では、東京と比較して、コミュニティ全体として移動性が低く、そこに生活をする場合には、長期間お互いによく知った人間関係のなかでコミュニケーションがおこなわれる。その結果として、行動の背景にある状況や理由もあらかじめよく知った上で判断がなされることが多いと推測される。

すなわち、このような語りのスタイルの違いは、それぞれの地域の生活状況における適応パターンの差を反映しているものと考えられる。東京では、多様な視点からみた複数の可能性から、もっとも適切な選択肢を絞り込んでいくことが求められ、沖縄ではむしろそれよりも、あまり背景を詮索する

よりも他者の現在の行動自体を正確に判断することが必要となるのである。母子の共同で構成される語りでは、このようにそれぞれの地域に合った語りのスタイルが選択され、使用されており、子どもは母親とのコミュニケーションに参加することによって、必然的にそうしたスタイルを適応的に獲得していくものと考えられる。

引用文献

- 池田祥子. (1999). 幼児の「ふりの枠」操作に関する発達の検討. *広島大学大学院教育学研究修士論文抄*, 393-396.
- 上田礼子. (1998). *発達のダイナミクスと地域性-岩手/東京/沖縄 '72-'97*. 京都: ミネルヴァ書房.
- 柿沼美紀. (2001). 母親の語りに見られる地域差の検討. *母子研究*, 21, 56-61.
- 柿沼美紀・上村佳世子. (2001). 母親の語りに見られる地域差—東京と沖縄—. *発達研究*, 16, 116-124.
- Miller, P.J., Potts, R., Fung, H., Hoogstra, L., & Mintz, J. (1990) Narrative practices and the social construction of self in childhood. *American Ethnologist*, 17, 292-311.
- Wakabayashi, T., Fernald, A., & Kakinuma, M. (2001). What, how and why?: Japanese and American mothers' questions in joint storytelling sessions. Poster presented at the 2001 Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Minneapolis, MN.
- Wertsch, J.V. (1998). *Mind as action*. New York: Oxford University Press.

<謝 辞>

本研究の調査にご協力をいただいた保育所の職員の方々はじめ、保護者、園児の皆さんに御礼申し上げます。また、格別のご配慮をいただいた琉球大学の島袋恒男・嘉数朝子両先生に、心より感謝申し上げます。

<付 記>

本研究は文部省科学研究費補助金交付研究 基盤研究(B)「行為の理解, 推測, 評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト: 日・米・中比較研究」(課題番号: 14310062; 研究者代表 東洋)の一部として実施された。